

げ てん 下天のうちを比らぶれば

細野 哲弘 (株) JECC代表取締役社長
(元 特許庁長官 元 資源エネルギー庁長官)

お城好きの端くれとして、かねて不思議に思っているのだが、「天守閣」とは一体何だろうか？

ものの本によれば、「天守閣」という用語は明治以降のものらしく、それまでは「天守」と言い、ときに「天主」又は「殿守/殿主」という字をあてた。その由来には諸説あるが、「一朝事ある時の拠り所」である主殿（城）にあって、「戦況を眺望して指揮を発し、場合により最後の立て籠もり処ともなる特別の高楼」として理解されている。

現在目にすることのできる「建物がある城」は数こそ比較的少ないが、そのかなりのものに現存、復元、復興、模倣¹⁾を問わず、天守閣（以下「天守」という）がある。そのため、天守は城につきものであり、城あるところ天守ありと思ってしまうのだが、実はそうではないことは城の変遷を見るとわかってくる。戦国の時代より遡ると、確かに城があり建物もあるが、必ずしも天守があるわけではないし、むしろ天守がある方が稀^{まれ}である。

後に天守と云われる高樓又は高櫓^{たかやぐら}は意外に歴史が浅く、その嚆矢としては、16世紀中頃の尾張楽田城、摂津伊丹城があり、更に松永弾正久秀の築いた信貴山城の四層の高櫓（1580年）がある²⁾。いず

れも「軍事施設」そのもの。

先に、城は「一朝有事の拠り所」と云ったが、天守が城の一部であり、城が軍事防御のための施設である以上、天守も城の軍事上の意味合いの変遷により、その意味と形が変化してくる。天守は、戦国時代（室町末期）以降に軍事的実用性を主眼とした城の究極的施設として構築された。その後安土桃山を経て江戸時代の将軍も三代くらいを数えて³⁾、戦役のない「太平の世」の様相が濃くなるにつれ、徐々に軍事的要素が薄らいでいった。それとともに「為政者たる城主の権威」を誇示するもの・見せるものに変質していったと考えるのが、「常識的」な理解であろう。一般的に、色の黒っぽいものは、武辺一辺倒の構造、形が多く、時代が下り象徴色が濃くなるにつれ、白っぽく、金色の装飾などが目立つようになっていく。また、もともと高樓は為政者の普段の居住には不便であり、平時の行政の用にも機能的でないため、かねてより戦闘防御の城郭とは別に、城主の住居又は行政庁の便宜に別途平地に館（庁舎）を建てるが多かった。「太平の世」にあっても、天守は兵器や食料の備蓄庫として使うほか、高層建築のない時代には権威の象徴としてその相貌^{おしだし}はなか

1) 今なお現存する天守閣は12と少ないが、このほかに①「復元天守」(元の場所に、図面などに基づき、少なくとも外観は以前のように復元したもの。木材材料、構造、工法に忠実に復元した「木造復元天守」と鉄筋コンクリート構造などで外観だけまねた「外観復元天守」がある。白河城、掛川城は前者の例。名古屋城、大垣城は後者に分類される。なお、名古屋城については木造復元天守に再建しなおすとの計画が具体化しつつあり、ファンとしては楽しみである)、②「復興天守」(元の場所に、構造、意匠を問わずに改変して建設したもの。大阪城、岐阜城など)、③「模倣天守」(元々城はあったが、天守のないものや史実が不明の城に建てられたもの。洲本城、郡上八幡城など)がある。このほか、観光用に史跡と関係ない場所に史実を勘案せずに(他の有名天守を真似て)建てた④「天守閣風建築物」がある。

2) 尾張楽田城、摂津伊丹城の天守は、遺構がなく文献でのみ確認されるにとどまるが、信貴山城天守は「甲子夜話」に記載があり絵図などが残る。松永弾正久秀は下剋上の梟雄(きょうゆう)で、石川本願寺攻めに際し当初臣従した信長に突如反旗を翻した。信長の命を受けた信忠軍に攻められた折、天下の名品と言われた平蜘蛛茶釜(ひらぐものちゃがま)を差し出せば助命するとの申し出を蹴り、自ら茶釜を叩き割り天守に火をかけて自害した。なお、彼の築いた大和多聞城にも天守があったとされる。

3) 一般に、徳川幕府成立(1603年)と二度の大坂の陣(1614-15年)を経て「太平の世」に移って行ったとされるが、それ以後も所謂外様の雄藩は各地に依然健在であった。豊臣政権下「五大老」の筆頭でしかなく、精々「同輩の中の第一人者」くらいであった徳川家が、漸くにして覇を認識したのは、参勤交代を制度化した寛永の武家諸法度制定のころ(1635年)であろう。それまでは潜在的ライバル大名の反攻に備えるため、当時の城は依然「軍用」、「武辺」を旨とし、武者走り、石落としなどの仕様が幅を利かせている。

なかに効果的であったと思う。が、しかし沿革の名残として維持管理はするものの、時に自然災害や火災などで消失した場合には「象徴たる装飾のためだけ」に新たに費用をかけては再建しないという判断がなされることもあった⁴⁾。

そう思ってあちこちに残る城郭を改めて観ると、江戸時代から現存するもの、復元・復興、模擬したり創作したものを含め、ほぼその理解に沿った常識の幅に収まっているように思える。

ところがである……。現存しないし、その後復元・復興もされていないが⁵⁾、その常識から大きくはみ出るものがある。

その名前は歴史の時間に習ったので知ってはいたが、建築物としての途方もない「はみ出し」を目の当たりにし、その意味するところに驚愕したのは1992年のこと。

筆者は通商産業省（現経済産業省）在職のころ、博覧会行政を担当したことがある。ちょうどその折、

「1492年のアメリカ大陸発見から500年」を期してスペイン・セビリアで「万国博覧会」が開催され、我が国も有力協賛国として参加し、民間からの出展と併せてJETROの多大なる貢献の下に政府館（日本館）を出展した⁶⁾。校倉造^{あざくらづくり}を倣った和の木造様式の建物も趣があったが、その中の日本らしさの粋を集めた展示物の最大の目玉が「安土城天守閣」であった。

もとより、大建築である城郭全部を具現することは出来ないので、最上階の二層だけを内部が見えるようにアレンジして再現したのである。写真はその時のものである。また展示物は本来博覧会終了後に取り壊すことが原則であるが、当時の安土町長さんからのたつての希望により、閉会后特別にこれを移築することとした。今は近江八幡市の一部となっている同町の「安土城主信長の館」には、展示されていたものに庇屋根、金色の鯨^{しゅう}の乗った大屋根など幾つかの意匠や最上階を真横から見られる工夫を加えて立派になった姿を見ることができる。



セビリア万博日本政府館全景
（「1992年セビリア万国博覧会公式参加記録（写真集）・日本貿易振興会」より）



セビリア万博日本政府館木組み
（「1992年セビリア万国博覧会公式参加記録（写真集）・日本貿易振興会より」）



安土城主信長の館 外観（近江八幡市安土町）

- 4) 消失後再建されなかったものとしては、明暦大火の後市井の復興を優先して再建を見送り富士見櫓を代用にした江戸城、消失のあと幕府への遠慮と財政難で三重櫓の建設で代用した福井城、金沢城などがある。
- 5) 伊勢のテーマパーク（伊勢安土桃山文化村）には、かなり外観の立派な安土城天守閣がある。が、しかしこれは天守閣風建築物である（上記1）参照）。
- 6) 今年は「セビリア万博出展25周年」で、記念の催しのお誘いも戴いた。本年4月にはスペインのフェリペ国王御夫妻の訪日もあった。本稿を綴るに際し、当時の人脈を辿り、原朋子氏を經由してJETRO総務課長・原宏氏、海外調査部主幹・長島麻子氏から格別の便宜を頂戴し、当時の公式参加記録（写真集）や絶版になっている日経新聞社刊「幻の安土城 天守復元（堺屋太一監修）」などを見せて戴いた。

金色に燦然と輝く外観、内装は、大航海時代に黄金の島とされた日本のイメージとも重なって大変な評判をとったのだが、是非その中身に注目したい。

まず、上層二層の形、装飾であるが、それ以下の層の眺えとは明らかに違っている。安土城は、展示にはないより下層の部分も含め、地上6層(4層目は屋根裏階)、地下1層の7層建築であるが、1層目こそ入口その他の都合で不等辺八角形であるものの、あとは4層以下が普通の四角の構築物である。それに対し5層目は四間八角、最上の6層目は三間四角であり、外観の見てくれは普通の城に上部二層を「とってつけた」ように見える。しかし、その内

部空間はというと、金箔、金泥を使った濃絵を駆使した美的センスが散りばめられている格別のものである。とりわけ5層目は外部の柱は朱色の漆塗り、内部は金箔が押し込められている。この階は仏教画で、釈迦が霊鷲山の山中で説法するのを釈門十大弟子や諸菩薩が取り巻く構想である。柱には、昇り竜、降り竜の彫刻が施されている。最上階は勾欄付きの縁が巡る内部を黒漆塗りとし、四方には中国の聖人、君主(三皇五帝、孔門十哲、商山四皓、竹林七賢)の儒教画が金碧極彩色で仕上げられている。天井には天人影向(天女像)が描かれている⁷⁾。

しかも、信長は自ら及び家族の住居用の館を別に



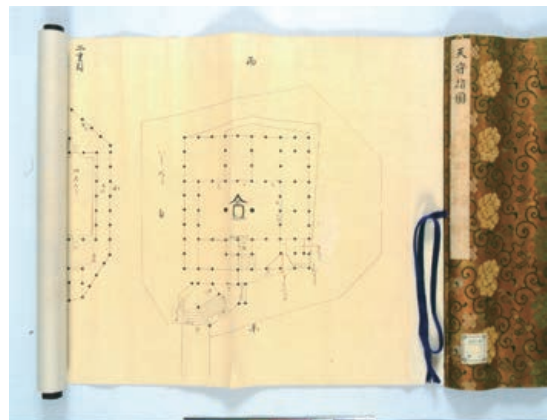
安土城5層目正面
(「1992年セピリア万国博覧会公式参加記録(写真集)」・日本貿易振興会より)



「孔子と孔門十哲」図(「幻の安土城 天守復元(堺屋太一監修) 日経新聞社」より)



安土城5層目から6層目への階段
(「幻の安土城 天守復元(堺屋太一監修) 日経新聞社」より)



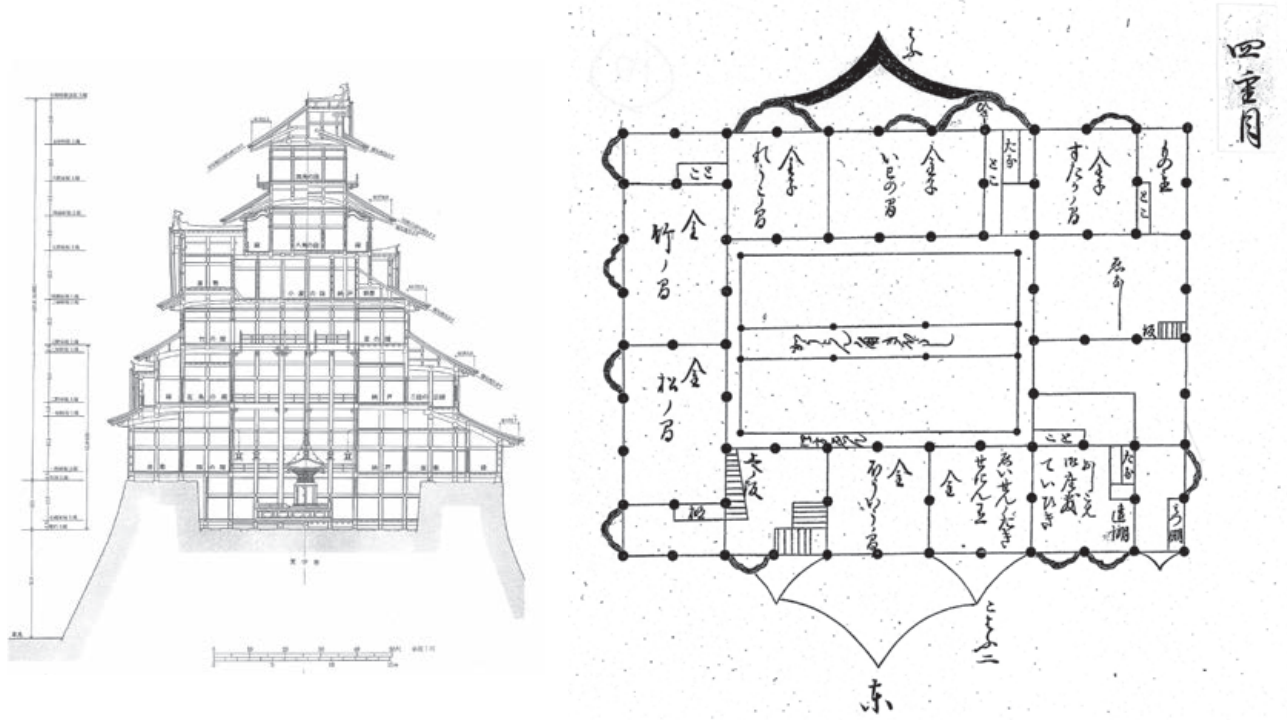
「天守指図」巻頭(静嘉堂文庫所蔵)

7) 展示にはないが、他の階(4層目の屋根裏階を除き)もすべて狩野永徳とその一門の手によって描かれた。セピリア博覧会への出展に当たり、襖絵、障壁画の再現には東京芸大、京都市立芸大の美術専門家グループによる献身的かつ最上級の協力を得た。本能寺の変の際に天守は焼失し全ては灰燼(かいじん)に帰したため、再現作業の大変さが偲ばれる。なお、数少ない描写資料として信長が狩野永徳に描かせたという「安土図屏風」がある。天正使節とともに欧州に渡り、ローマ法王に献上されたが、1585年にバチカン宮殿内で展示されたとの記録があるものの、残念ながらその後行方が分からなくなっている。

用意せず、まさに天守に住んだとされる。実は、信長が安土城を日常どのように使ったかについては諸説ある。華麗な書院造の天守三層目の階で寝起きたとするもののほか、天守から一段下がった処に普段の住居用に別の棟を築いていたとするものがある。ここでは「天守指図」、「安土城天守復元図」など⁸⁾によって前者の立場をとっている。展示にはないが、地階から三階までが「吹き抜け」になっていて、中央に過去仏多宝如来の舍利塔にあたる宝塔が置かれていたとされる。近世武家の屋敷は「表」、「中奥」、「奥」など諸々の機能を持つ部屋が平屋構造の下で水平方向に配列されるものが多いが、安土城では吹き抜けという空間を利用しつつ、これらが垂直に展開されている。今風に言うと、多層メゾネットタイ

プ住居か。「中奥」、「奥」を設けて「天守に住む」というのは、常在戦場の常時立て籠もりであるはずはなく、「掛け値のない素の自分が普段から馴染み安らぐ空間として天守を捉えていた」ということである。だから、その詠えの趣向は住む人の常の心証を強く反映する。

これには導線がある。信長はこの時期の武将には珍しく、本拠を頻繁に替えている。那古野城、清州城、小牧山城を経て、安土城の前に岐阜城（稲葉山城）に拠った。彼は岐阜城に山頂の城と対で麓にもう一つの天守を築いている。「御殿」とも称される館であるが、最近の発掘調査で、四階の楼閣を擁していたことがわかってきた⁹⁾。山頂の城は、斉藤氏を倒



安土城天守断面
 (「安土城天守復元図05」内藤晶 國華988号付録より)

安土城見取り図(「天守指図」より第三層平面図。地下からの吹き抜けの最上部。同図では地下を第一層としているので、「四重目」との表示となっている。)

8) 「天守指図」とは加賀藩の作事方で御大工も務めた池上家の二代目右平の手になる安土城の建築技術見取り図のこと。セビリア博覧会出品に際しても上層二階の意匠、装飾を復元するに当たり、その記述は最重要な拠り処とされた。その「天守指図」を、佐々木幹夫氏(三菱商事特別顧問)のご紹介で同氏が理事長をされている静嘉堂文庫にて原本で拝見できたのは貴重な体験であった。河野元昭館長(京都美術工芸大学長)、安藤一郎常務理事、成澤麻子司書から多々厚誼を頂戴した。また、河野館長からは1976年の雑誌「國華」987、988号に内藤晶氏による安土城の研究記事が連載されていることを教えて戴いた。取り寄せて988号付録の「安土城天守復元図」と併せ参照させて頂いた。ここでの記述の多くはこれらに依っている。

なお、本稿準備中に発刊された本誌前号の「城シリーズ第46回安土城(深草祐一)」にも啓発を受けた。後発記事としては少しでも付加価値を高めるべく「裏付け」に注力した。また、安土町の城址を訪ね実際に急坂の大手道から天守址まで登ってみて、見晴らし眺望や地形の雰囲気から彼はやっぱり「天守に住んだ」との強い印象を得た。

9) 岐阜城の御殿の発掘調査は比較的最近で、1984年に始まり、現在第4次(2006年～)である。現場は段々地形を巧みに使っており、護岸には金華山ととれるチャート(二酸化ケイ素(石英)を主成分とする堆積岩の一種。放散虫の殻などでできていて硬い。)を石列・石垣に使用している。



岐阜城御殿発掘現場



岐阜城御殿復元イメージCG
(岐阜市 織田信長居館跡 屋外表示解説より)



岐阜城御殿見取り図(岐阜市「国史跡 岐阜城跡」第4章「山麓居館の地形復元図」より。A地区は滝と庭園跡、B地区は谷奥の蔵などの区画、C地区は館の中心建物の区画、D地区は入り口横の斜面。赤丸は庭園跡)

して引き継いだ城であるので、(今ある復興天守と同じかどうかはともかく) 戦国時代のほかの城と同列の「軍事實用」のものである。注目すべきは、一部を行政庁としても使った麓の館の敷地内に天守(高楼)を造り、山頂の城と対にして「奥」を形成したことである。イエズス会宣教師で当時信長から岐阜城に招かれたルイス・フロイスはその著作「日本史」などの中で、その御殿を「地上の楽園」と形容し、次のように記している。「我が故郷ポルトガルから印度そして日本に至るまで、私が今日まで見た宮殿の中でこれほど精巧美麗清浄な建築はない。内部の諸室はまるでクレタの迷宮である」と。

京都の金閣には池が、銀閣には築山がある。巨石列によって画された奥に建つ御殿は、意匠をこれらに借り、山を背景に岩盤を流れ落ちる滝の前に庭園を配し、敷地の真ん中に谷川を流している。高楼(天守)は周りを漆塗りの廻り縁で囲まれた広間を一階とし、金製の飾り金具や釘が使われ、壁には中国などの物語が描かれていたとされている。二階には夫人濃姫や侍女たちの部屋が並び、金襴の幕がかかっていたとされる。三階(屋根裏階の可能性あり)、四階は御殿一の眺望を誇り、敷地内数か所の池や庭園はもちろん市内をも望むことができ、趣向を凝ら

した茶室などがあったという。信長は、山頂の城と御殿を小曲輪で繋ぎ一体化して頻繁に往復し、山頂の城と高楼を含む居住部分(御殿)については特別に許可された者以外の立入りを許さなかった。彼の幕僚として例外ではなく、その意味ではフロイスへの厚遇は特例であっただろう。市中からは当然絢爛たる御殿の一部が見えたはずであり、彼の権力を垣間見させるのに充分であつたらう。御殿の内部においては個人の嗜好を優先して自分だけの空間を造るとともに、対外的には「見せる」ことで権力を誇示する趣向である。この辺りにのちの安土城に繋がる信長特有の世界観の迸りを感じる。

以下は、筆者の想像(妄想)の域を出ないが、信長は既に岐阜城に移った頃から「違う世の中の創造」を強く意識し、精神的には現世を超越してもっと先の世界に幽離し始めたのではなからうか。井ノ口を岐阜と改め、「天下布武」の印を使い始めるのがこの時期であるが、そのあとの「布武」の経過はともかく、すでにこの時に「武による治」を凌駕した天下静謐のイメージをもち、その中で独特な心理境地に達していた気配がある。楽市楽座などの「経済政策」の展開と併せ、自分の世界(個の世界)ではほ

とんど趣味・酔狂ともいえる造作を志向した。稲葉山の麓の御殿は、この時期のものとしては驚くほど軍事防御性が重視されていない¹⁰⁾。

岐阜城の御殿とは安土城の習作ではなかつただろうか。我々はのちの歴史を知っているから、彼が早い時期から「特別の発想」をしたことにあまり違和感を覚えないが、この時期はまだ彼がやっと美濃を攻略したばかりの頃である。尾張・美濃合わせて110万石の太守になり、せいぜい朝倉氏を上回る程度の勢力になったとはいえ、周りの情勢は決して「趣味の御殿」などを造っている場合ではなかつたはずである¹¹⁾。

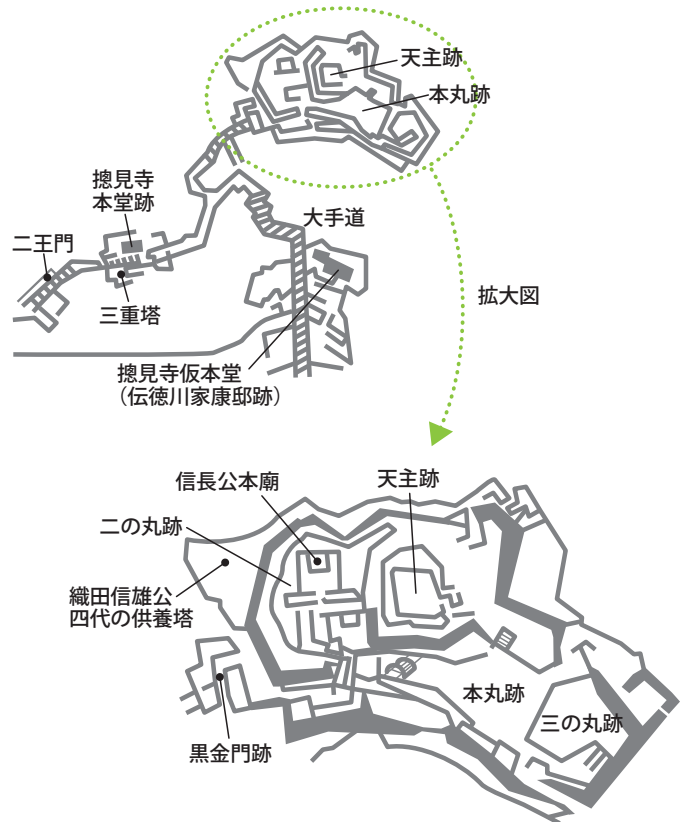
安土城に戻ろう。先に述べたように、安土城の上層二層の意匠はそれより下層のそれとは明らかに異なり、自分を中国の偉大な先人聖人君主、釈迦と同

列において、その高みと悠久の治政を夢見た証拠のように思える。

また、こうした意匠はもちろん、天守そのものを他の者に容易に造らせなかつたことにも、彼の特別な思い入れが窺われる。信長は軍令権（現地指揮権）こそ与力派遣した部将に分担させたが、軍政権（部隊編成・動員権、拠点配置）は自ら独占した。城郭建設も軍政権の一環であり、彼の直轄である。その管理は厳密かつ徹底している。平定した諸国の既存の城の廃止（廃城令）と併せ、新築にも事細かに指示を出している¹²⁾。そのうちでも天守は彼の治政スタイルの重要装置として格別である。その建設を許されたのは、琵琶湖の廻りの長浜城（羽柴秀吉）、大溝城（織田信澄・信長の甥）、坂本城（明智光秀）など極めて限られる。



安土城址（本丸から天主に上がる石段）



安土城址図（特別史跡安土城跡 摺見寺第2版より作成）

10) 信長は岐阜城に移る前に、小牧山城を築いて移り住んでいる。この城は結果的に4年ほどしか使われなかつたが、美濃攻略と言うと西美濃三人衆の内通、墨保の一夜城などがハイライトされてきたが（本誌274号「墨保の一夜城」参照）、その前段階で東美濃を威圧するに重要な役割を果たした。その意味でも、防御よりも「周りから見えること」に重きを置いたとされる。なお、本年4月に発表された日本城郭協会の「続日本100名城」に選ばれている。

11) 信長が岐阜城に移ったのは1567年（今年が入城450周年）。当時、上杉（越後）、武田（信州・甲州）、北条（相模）、朝倉（越前）、浅井（北近江）、松永（大和）、三好（畿内・阿波）、大内（長門）、毛利（安芸・備中・備後）など、各地はまさに群雄割拠真々盛り、戦国そのものの時期。とても「武」用を超えた嗜好を發揮して館を作るような状況ではなかつた。

12) 信長は、城の石垣、瓦の使用にも自分、一門、その他の重臣ごとに明確に仕様を区別し、自ら差配した。

彼を絶対の頂点とする秩序の中で、天守は外にあっては「他の追随を許さぬ権力の象徴であり、他を畏怖させる装置」であり、内にあるのは「彼だけに許される揺蕩う至高の小宇宙」であった。冒頭に、天守を「戦況を眺望し」云々の施設と書いた。遠くが見渡せるというのは、遠くからも見られるということ。そのようなものをプライベートな住居にするという趣は、ある種ナルシストの気分似ている。

安土城では、天守のほかに、城の敷地内に「天皇の行幸」用の施設も造った。天皇が貴族や時の為政者の私邸などに赴くことは幾多の例があるし、そのために迎えする側が格別の普請をするのも珍しくない。しかし、自らは普段はより高層の建物に居て、天皇を迎えるために「降りていく」という詭を想定するのは異例ではなからうか¹³⁾。

信長は幸若舞の「敦盛」の一節を好んだといわれている。

人間五十年、下天のうちは比らぶれば、夢幻のごとくなり
一度生を亨けて、滅せぬもののあるべきか

一ノ谷の合戦で若き平敦盛を討ってしまった熊谷次郎直実が無常を感じて出家する際に謡う段りで

ある¹⁴⁾。信長公記によると、信長はこの一節を謡い舞ったあと、法螺貝を吹かせたうえで具足を纏い、立ったまま湯漬をかき込むと、敢然と桶狭間に出陣したとされている。

下天とは、仏教の六欲天の一番下の世界のことで、そこでの一昼夜は人間界の50年にあたるとされている。人間というのは「人の世」のことで、この世の50年というのは仏への最初の入口の世界では、一昼夜にしか当たらない儂く幻のような時間の長さであるという無常観を表す意味になる¹⁵⁾。

しかし、人は必ず死ぬし、所詮は儂い命だからといって、「エイ、ままよ」とばかりにイチカバチの戦に出ていくというのは、桶狭間合戦の奇襲性・劇的性には合致するのであるが、どうも彼ののちの生きざまにはそぐわない¹⁶⁾。桶狭間の後、彼は清州城から小牧山城、岐阜城を経て安土城に至るのであるが、この過程は現世離れた彼独自の精神昇華のプロセスでもある。無常観とは時間の超越である。超越した時間では、人の世と仏の世界ではどちらが主であろうか。いかにも逆説的であるが、舞曲「敦盛」には、現世を離れて、むしろ彼に一瞬(一昼夜)の中に一生(50年)或いはもっと長い時間(悠久)を見させるようになる萌芽があったのかもしれない。

- 13) 信長が天皇家との関係をどのように考えていたかは謎である。彼は、足利義昭を奉じて入京した以降、将軍となった義昭や朝廷からの度々の官位叙位提示を固辞し、のちに受けた右大臣・正二位もたいした理由なく返上してしまっている。武田を滅ぼした後、朝廷からは更に「征夷大將軍、太政大臣、関白のいずれか好きなものを」という破格の沙汰さえ受けている。その返答をすることなく運命の本能寺の変を迎えてしまうのだが、正親町(おおぎまち)天皇に改元(永禄→天正)を迫ったり、強引に正倉院の蘭奢香を切り取るなどした振る舞いに鑑みると、朝廷の秩序に取り込まれることになる受位任官に関心があったとは思われない。歴史に「if」をいうのは意味をなさないが、本能寺で斃れなかったら、彼独特の天下静謐の世界がその後どう構築されたかには興味が尽きない。ここでの主題ではないが、個人的には、土岐氏所縁(ゆかり)の名門出の幕臣であって宮中の有識故事にも明るく旧来の制度に見識があり過ぎた明智光秀が、信長流の天下像に恐怖して謀反に及んだとする「光秀の定理(垣根涼介)」のストーリーに得心するところ大である。
- 14) 熊谷直実が一ノ谷合戦(1184年)において敦盛を組み伏せこれを討たんと兜を跳ね上げたところ、戦死した嫡男直家と同じくらいの歳の若武者であることに気づき、とどめに逡巡したとされているが、一部脚色がある。息子の直家はその合戦で負傷はしたが生き延び、家督を継ぎ53歳まで存命した。ただ、直実はその後の恩賞の沙汰に不満があったことも含めて無常を感じ、法然の下で出家。法力房蓮生と称した。
- 15) 下天(げてん)を化天(けてん)とも表記する説があるが、化天は六欲天のうち下天のもう一つ上の世界(世化楽天)で、そこでの一昼夜は800年と言われているので、話としておかしい。なお、六欲天の最上位を第六天(他化自在天)というが、その支配者が「第六天魔王」である。ヒンドゥーのシヴァ神のこと。信長はのちにそれを自称し、武田信玄への書状などにもそのように自書しているし、フロイスの著書にも出てくる。彼の自己意識の在り様には、なかなか興味尽きない。
- 16) もともと電撃戦とされる桶狭間の合戦においても、出撃してから一直線に進攻したわけではなく、田楽狭間で今川義元が休息するという確定情報を得るまで、城を出てから半日以上「うろうろ」していたとされる。他の戦いでは、彼は慎重にも慎重を重ねて相手の勢力に倍するような軍勢で当たったし、戦況に利あらずとみればさっさと退却した。むしろ例外は、石山本願寺を攻めた天王寺砦の戦くらいではなからうか。寡勢を陣頭指揮して大軍の一向衆を向こうに回し、自らも雑賀衆に銃撃されて負傷したとされる。このあたりの物語は、「尻啖え孫市(司馬遼太郎)」や「村上海賊の娘(和田竜)」を読むのが楽しい。